# 令和2・3年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　E小学校

## 現状と課題

令和元年度学力学習状況調査結果
※令和２年度は未実施

| | | 国語科 | 算数科 |
|---|---|---|---|
| 4学年 | 県平均 | 56.1 | 70.2 |
| | 本校 | 51.5 | 69.4 |
| | 差 | -4.6 | -0.9 |
| 5学年 | 県平均 | 52.3 | 68.2 |
| | 本校 | 43.8 | 56.9 |
| | 差 | -8.5 | -11.3 |
| 6学年 | 県平均 | 62.2 | 61.5 |
| | 本校 | 60.3 | 59.1 |
| | 差 | -1.9 | -2.5 |

めざす児童像
意欲あふれる児童
自ら考え解決できる児童

- 自己有能感の向上
- 生活満足感の向上
- 学習適応度の向上
- 学習習慣の定着
- 学習の基礎基本の定着
- 課題のある家庭への支援

意欲の向上

## 現状と課題をもとにした仮説

**学習意欲が高く、主体的に学ぶ児童の育成**

～できた！わかった！楽しい！！を実感できる授業づくり～

仮説
子供達の学習意欲が高まれば、主体的に学びに参加し、
一人一人の確かな学力の定着につながるであろう

【仮説１】児童が「できた」「わかった」と感じられる授業を展開すれば、学習の楽しさを実感し、学習意欲が高く、主体的に学ぶ児童が育つであろう。

【仮説２】自分に必要な学びを選択する力を身につけさせれば、学習への自信がもて、学習意欲が高く、主体的に学ぶ児童が育つであろう。

【仮説３】学級での所属感・連帯感を感じられるような豊かな人間関係でつながる学級経営が行われれば、非認知能力が高まり、学習意欲が高く、主体的に学ぶ児童が育つであろう。

## 事業実施報告

**令和２年度**

| | |
|---|---|
| ７月　３日 | スクラム事業に関する研修会 |
| １０月２８日 | 教育委員会・教育事務所教育支援担当・学力向上推進担当学校訪問 |
| １１月　８日 | 校内授業研究会 |
| １月２０日 | スクラム事業授業研究会 |

**令和３年度**

| | |
|---|---|
| ６月１５日 | 校内授業研究会 |
| 夏季休業中 | 算数科指導案作成（全教員） |
| １２月　６日 | 教育委員会・教育事務所教育支援担当・学力向上推進担当学校訪問 |
| １月２５日 | スクラム事業授業研究会（公開） |
| １月２７日 | ○○部地区学力向上推進協議会・発表会 |

## 仮説をもとにした取組内容

### 家庭学習が主体的な学びとなるための取組み

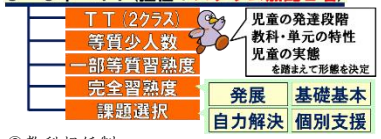
①全校で「めざせ４冊！家庭学習大作戦！」の取組
➢家庭学習ノートを１冊を終えるごとに、校長に提出し、賞状をもらう。
賞状をもらった児童の写真を掲示し、家庭学習への意欲を高める。
②個に応じた宿題の提示の提供
➢習熟度・個に応じた量と質を相談
➢計算練習は習熟度に応じ、式が印刷済みのプリントを用意し、計算に集中
➢習熟度に応じ、解き方の手順を明記したプリントを用意

### 自分に必要な学びを選択できるチャレンジタイムの取組

①週４日、１０分実施
②国語や算数のプリント学習に取り組む
③学習するプリントは「児童自身が、自分の理解度に応じて選択」
④学習するごとに、シールを貼り自身の成長を実感
⑤マイカルテを作成し、学びの足跡を残す
➢自分を知り、自分にとって必要な学びの選択を目指す。

### 授業改善・授業力向上の取組

①授業形態の工夫
**１・２年　ＴＴ（担任＋教育支援員）**
**３～６年　４Ｔ（担任＋スクラム加配２名）**



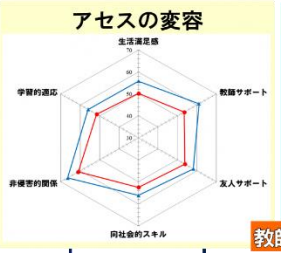

②教科担任制
➢３年生以上の一部教科で実施
専門的な授業を展開
③UDの視点を取り入れた授業
➢課題に対する選択肢・教具の工夫
学習の現在地の可視化・振り返りの目
④教え合い・称賛する場面の設定
➢異学年からの学び・高校生との交流
⑤ＩＣＴの活用・ノートの展開
➢思考ツールの活用・考えの共有
習熟度に応じた課題とヒント
欠席児童へのオンライン指導

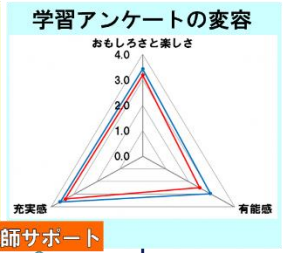
### 授業・学級づくりの７つの柱

①学級経営を土台とした学力向上
➢埼玉県学力学習状況調査の結果より、学級経営が学力向上の土台となることが示されている。
②全職員で全児童を見取る体制
➢担任だけではなく、全職員がすべての教育活動で７つの柱を実施する。

# 令和2・3年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　E小学校

## 現時点での成果




教師サポート

学習的適応　生活満足度　有能感

### 成果①（アセス・学習アンケートの向上）

Ｒ２・７月とＲ３・１１月に行ったアセス（４学年以上対象）の結果を比較すると、全項目で上昇した。また、学習アンケート（全学年対象）においても、全項目で上昇という結果となった。本校が意欲向上を図るための重点項目としている「学習的適応」「生活満足度」「有能感」が向上したことからも、学習意欲が向上したと考えられる。さらに、教師サポートの項目が大きく向上した。これは、本研究において、職員の個別支援等を児童が感じ取ったため向上した結果ととらえることができる。

### 成果②（県学調県平均との差）

Ｒ１とＲ３の県学力・学習状況調査を比較（Ｒ２は未実施）すると、６項目中５項目において上昇した。特に５学年の算数においては、県平均を上回る結果となった。同一学年の経年変化においても、現６学年の児童は、４学年のときと比較し、国語・算数の両教科において、県平均との差が縮まっており、学力の向上が見られた。

**県学力・学習状況調査のＲ１とＲ３の比較**

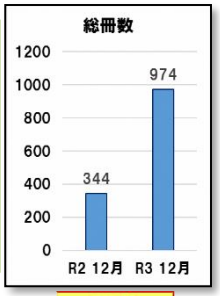
| | | 国語科 | | 算数科 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | Ｒ１ | Ｒ３ | Ｒ１ | Ｒ３ |
| ４学年 | 県平均 | 56.1 | 58.0 | 70.2 | 69.9 |
| | 本校 | 51.5 | 56.9 | 69.4 | 68.6 |
| | 差 | -4.6 | +3.5 -1.1 | -0.9 | - 0.4 -1.3 |
| ５学年 | 県平均 | 52.3 | 56.7 | 68.2 | 61.6 |
| | 本校 | 43.8 | 56.3 | 56.9 | 62.5 |
| | 差 | -8.5 | +8.2 -0.3 | -11.3 | +12.1 +0.9 |
| ６学年 | 県平均 | 62.2 | 58.6 | 61.5 | 60.9 |
| | 本校 | 60.3 | 58.6 | 59.1 | 60.6 |
| | 差 | -1.9 | +1.8 -0.1 | -2.5 | +2.1 -0.3 |

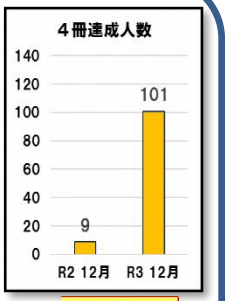
**現６年生が４年生の時との比較**

| | | 国語科 | | 算数科 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 4年(R1) | 6年(R3) | 4年(R1) | 6年(R3) |
| 現6年生 | 県平均 | 56.1 | 58.6 | 70.2 | 60.9 |
| | 本校 | 51.5 | 58.6 | 69.4 | 60.6 |
| | 差 | -4.6 | +4.5 -0.1 | -0.9 | +0.6 -0.3 |

### 成果③（家庭学習に対する取組の向上）

校長に提出することで賞状をもらえる、また、賞状をもらった児童の写真を掲示することで、児童の家庭学習に対する意欲を向上させ、学びを途絶えることなく続けることができた。昨年度の１１月は全校で３４４冊達成だったが、今年度１１月現在で９７４冊と３倍近くなった。４冊達成した児童も９人から１０１人と大きく伸びた。



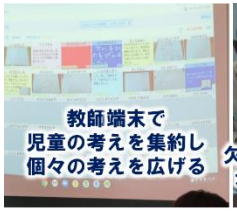




### 成果④（学びの選択による意欲の向上）

算数科における課題選択の学習形態・チャレンジタイムの課題選択学習・個に応じた宿題の提供等を通して、児童が自分自身でＰＤＣＡサイクルを築くことができた。マイカルテを作成し、学びの足跡を残すことで、児童自身が自分の力を知り、自分の力を伸ばそうとすることで、学習意欲を向上させることができた。

### 成果⑤（教師の授業力の向上）

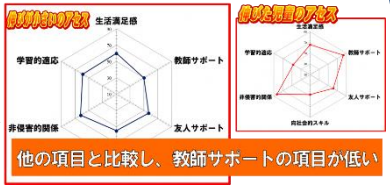
児童の実態をアセス等で数値化したことによって、どのような支援を行えばよいかが明確になった。その結果、特別支援教育の視点・授業のＵＤ化・ＩＣＴの活用など、職員一人一人が研修を重ねるとともに、教師同士で学び合い授業力を向上させることができた。特に、ＩＣＴの活用には、全職員が取り組んでおり、ＩＣＴを通して、個別支援や授業のＵＤ化を図ることに成功した。



## 課題及び次年度に向けて

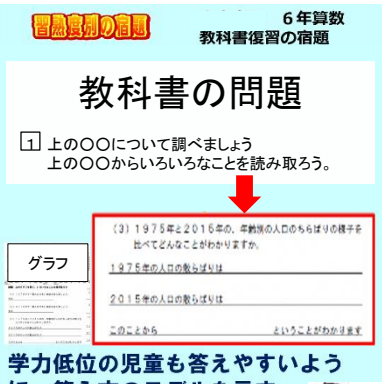
### 課題①（伸びが小さい児童に対するサポート）

学力の伸びを考察すると伸びている児童が大半を占める一方、伸びが極めて小さい児童もいる。そのような児童の、アセスを分析すると、右の図のような結果になることが多い。このことから、教師はサポートしていると思っていても、子供は支援されていると感じていない場合もある。担任だけではなく、全教職員で全児童をサポートし、意欲を向上させることが必要である。




他の項目と比較し、教師サポートの項目が低い

### 課題②（教師サポートが高い児童に対する学び合いの環境づくり）

「教師サポート」が伸びた結果、わからないところはすぐに質問できるので安心できる等よい効果もあるが、困ったときに相談する対象が教師になっている傾向があり懸念される。

今後友人との学び合いの場面を意図的に増やし、主体的な学習に向けた取組を継続していく。